

(外国語活動)

「外国語活動を通してコミュニケーションを楽しむ児童を育てる」

—自信を持ってコミュニケーションをとるための手立て—

大阪市内立九条東小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

本校では、「育てよう きよく、あかるく、たくましい子」という教育目標のもと、知・徳・体の調和のとれた人格形成をめざして、教育活動に取り組んでいる。

昨年度は、研究教科を「外国語活動」、研究主題を「外国語活動を通してコミュニケーションを楽しむ児童を育てる」と定め研究を進めてきた。また、大阪府が推し進めている「小学校低学年からの英語教育」（音声教材「Dream」を用いた学習）を本校でもスタートさせた。「教材・教具の作成」や「英語でコミュニケーションを楽しむ活動の工夫」など、一定の成果を得ることができた。しかし、「自信をもってコミュニケーションがとれない児童もいる」という課題も生じた。また、新学習指導要領が告示（平成29年3月）され、「外国語活動」（中学年）「外国語科」（高学年）の目標や内容が示された。

昨年度の課題を克服することや来年度から移行処置で実施される「外国語活動」（中学年）「外国語科」（高学年）を見据え、引き続き、「外国語でコミュニケーションを楽しむ活動」を研究していく必要があると考えた。よって、本年度も、昨年度と同様、研究教科を「外国語活動」、研究主題を「外国語活動を通してコミュニケーションを楽しむ児童を育てる」とした。そして、昨年度の研究の課題点を踏まえ、副主題を「自信を持ってコミュニケーションをとるための手立て」と設定することにした。

2. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力の基礎を養う活動を行う。 (低学年・中学年)
--

視点② 「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」の育成も含めたコミュニケーション能力の基礎を養う活動を行う。 (高学年)

視点③ 児童が自信を持って英語を用いたコミュニケーション活動ができるような手立てを考える。(全学年)
--

視点④ C-NET との TT 授業を効果的に行う。(全学年)

視点⑤ 「繰り返し学習」としてモジュール学習を進める。【音声教材「Dream」使用】 (全学年)

視点⑥ 教材の作成・整備を行う。(全学年)

3. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○「聞く」「話す」を中心としたコミュニケーション能力

音声教材やゲームを通して、しっかりとたくさんの英語を聞かせるようにした。そして、インプットされた表現を使用し、「聞く」と「話す」がどちらも入っているアクティビティで、英語を使って実際にコミュニケーションを取る活動を行った。高学年では、文字を読むことができる児童も増えてきたので、インタビューゲームの際には、使用する表現を記したリーディングシートを用意することにより、多くの児童が自信をもって話せるようになった。

○「読む」「書く」の育成【高学年】

高学年では、年間を通して、「読む」「書く」の活動を取り入れた。主に「Hi, friends ! Plus」の教材と単元に応じた自作の教材を使用した。正しいアルファベットを書かせるため、「Hi, friends ! Plus」同様、自作の教材にも必ず4線があるもの利用し、常に4線を意識させるようにした。高学年では、「読む」「書く」の活動を取り入れた結果、ある程度英語が読むことができるようになってきた。そして、「話す」場面では、自信を持っていないとき、英語で記された表現を頼りにしているところが見られた。自信を持って「話す」ためには、文字で示すことが大きな手立てであることがわかった。

○C-NET との効果的な TT 授業

C-NET との TT 授業では、児童一人一人に、より細かい指導をすることができ、アクティビティの際、児童の不安を軽減したり、自信を持って取り組ませたりすることができた。毎時間、C-NET との TT 授業ができるわけではないので、学級担任単独の授業で学んだ英語を使い、C-NET 来校の際、C-NET とコミュニケーションを取る活動を行った。自分が発した英語が C-NET に通じ、多くの児童が喜びを感じることができた。

○「繰り返し学習」としてのモジュール学習（音声教材「Dream」使用）

多くの「英語の音」に触れることや、画面情報から場面を感じ取り、その場にふさわしい表現の機能に気付くことで、コミュニケーションツールとしての英語の習得に非常に効果があった。しっかり音を聞かせることで、児童は徐々に有声音と無声音を意識して、正しい音を発するようになってきた。

○教材の作成・整備

動詞を扱う単元向けに、音声教材「Verb jingle」を自作した。絵カードは、指導者用（掲示用）、児童用を作成したが、指導者用には必ず文字を入れるようにした。その結果、文字に慣れ親しみ、文字を読むことができるようになってきた児童も多くいた。高学年では、「Trace&Write」用の教材も作成し、「書く」活動に活用した。

(2) 今後の課題

○ 外国語活動の授業の中で使う英語を増やしていくため、指導者の英語力を高めていく。（Classroom English の習得）

○ C-NET との TT 授業をより良くしていくため、打ち合わせの時間をしっかりと確保する必要がある。

○ 新学級指導要領に合わせ、年間指導計画の見直しを進めていく。また、今回の研究過程で作成した教材が、新しい年間指導計画のどの単元で利用できるかも考えていく必要がある。